

1. 出題の意図

課題文は、「センシュアス・シティ＝官能都市」という都市の魅力の新しい価値を論じる島原万丈＋HOME'S 総研『本当に住んで幸せな街 全国「官能都市」ランキング』（光文社、2016年）の一部である。

課題文では、ポストモダンの多様性肯定、「不特定多数の平等」の追求、それにもとづく「人間工学的に『正しい』やり方」によって「均質化した都市空間」を「現代社会のリアル」とする分析を認めながらも、その正しさがもたらす均質化・同質化は、都市部における再開発事業、郊外におけるショッピングモール誘致と宅地開発に関わるシェア争いという面では「誤り」になる可能性がある」と指摘する。そのような都市空間の均質化・同質化に際し、筆者は、多くのことが「特定のライフスタイルや趣味の共同体に支持されている」にもかかわらず、「正しい」特殊性と「正しくない」特殊性という「恣意的な了解」があると述べる。

しかしながら、そのようなまちの特徴や特殊性を「正しい」「正しくない」と判断することについては、必ずしもみなが合意しているのではない。筆者は、その焼失後の復興に際し、人々の声を受けて古くからの情緒あるまち並みを再興しながら「不燃化」に成功し、かつ、観光客にも人気の繁華街になった大阪の法善寺横丁を例に挙げ、都市計画がその都市に生きる人々を中心に行われるべきだと主張する。

都市計画を含め、地域社会が抱える課題は、経済や文化、政治、環境、法律、教育といった位相や立場から多様・多層に理解されることによって、その総合的な解決を構想し得る。地域社会学科では、教員と学生、学生同士のあいだで、全国各地から集まった学生たちがその経験や知識を持ち込み、ときにそれらを相対化しながら活発に議論が行われることを期待する。課題文が述べる「不特定多数の平等」の追求、「各自治体が直面している人口減という切迫した状況」、「市場全体でのパイが縮小していく中でのシェア争い」、「正しい」／「正しくない」という価値の恣意性、住民の合意形成といった今日の状況と筆者の主張を十全に理解したうえで、地域社会の問題を多様な側面から俯瞰的・構造的・総合的に捉える契機となるべく出題した。

2. 評価のポイント

問1

問1では、課題文の冒頭に引用される批評家・東浩紀氏が「人間工学的に正しい」と述べる内容を問われる。東氏の主張として、「人間工学的に正しい」やり方とは、「ポストモダンの多様性肯定の論理」にもとづき、「不特定多数の平等」のために「多様な人間集団の共生

を公準」とし、子どもから高齢者までいろいろな人たちが楽しめるように「清潔で安全」な街区をつくるやり方だと説明される。

これらの記述を簡潔に整理したうえで、その「正しいやり方」によって、「均質化した都市空間」、「判で押したように均質化したまち、特徴のないまち」が生まれると解答することが求められる。

問2

問2は、反対意見が少ないと考えられる「正しい」特殊性に比して、特定の趣味やライフスタイルをもつ人々にのみ支持される「正しくない」特殊性を分ける「恣意的な了解」があることを問う。筆者は、いずれの特殊性も「特定のライフスタイルや趣味の共同体に支持されている」にもかかわらず、論理的な妥当性なく、「正しい」「正しくない」の価値判断が行われている、とする。

このような筆者の主張を理解したうえで、それぞれの特殊性を比較して説明しながら、「正しくない」とされてしまう特殊性の中身をまとめることが求められる。

問3

課題文は、「人間工学的な」正しさや、反対意見が少ないと考えられる正しさ、「不特定多数のみんなのための」正しさにもとづいて、個別具体的なまちの特徴を一掃して均質化してしまう状況があることを指摘し、大阪の法善寺横丁の実例を挙げ、都市に生きる人々の声とまちの個性を活かしながら安全・安心を追求した都市計画の実際があることから、「全体としては似たような街ができるに決まっている」、「現代社会のリアル」だとして受け入れてしまうべきでない、と述べている。

解答の前段では、このような課題文の全体の論旨を理解し、①「焼畑農業的な不動産開発」、②それによって「まちの個性が失われて都市が均質化していく流れ」、③このような流れを「ポストモダンの宿命」とするべきでない、という筆者の主張をまとめることが求められる。

解答の後段では、このような筆者の主張に対する自身の考えを妥当な根拠を示しながら、説得的に論じることが求められる。

3. 採点講評

問1

課題文冒頭に引用される部分の言葉を用いながら、下線①前後の記述を踏まえて「マーケティング的」な「誤り」になる場合を適切にまとめた解答が多くあった。

しかしながら、「清潔で安全」であることのみが記述された解答があり、上記、評価のポイントで示したように、「正しい」とされる根拠として、「ポストモダンの多様性肯定の論理」、「多様な人間集団の共生」、「不特定多数の平等」があることの説明を求めたい。

問2

下線②前後の記述を踏まえながら、妥当な根拠がないながらも「正しくない」とされてしまうまちの個性についてまとめられる必要がある。しかしながら、「反対意見が少ない」特殊性のように「正しい」とされる特殊性と混同した解答や、「特定のライフスタイルや趣味の共同体に支持されている」のみを記述し、「恣意的な了解」があることが読み取れていない解答がみられた。

問1および問2ともに課題文の内容を理解し、文中の言葉を用いて記述することで十分に応答し得る。しかしながら、その場合でも過不足なく上記評価のポイントを押さえることが求められる。

問3

前段について、下線③の「焼畑農業的な」や「ポストモダンの宿命」という表現を十分に踏まえた説明になっていない解答、下線③前の記述のみで、全体の論旨の要点をまとめきれない解答が多くみられた。

後段については、筆者の主張に賛同し、そこで生きる人々、地域住民を中心にしたまちづくりの価値を論じる解答が大半を占めた。そのように地域住民が主体的に参画するための方途の具体例にもとづいて論じる解答が多く、なぜ地域住民のそれが必要であるのかは必ずしも十分に説明されておらず、課題文中で言われる「恣意的な了解」にとどまってしまっている解答が多くあった。

また、まちの個性の具体例を挙げ、それにもとづくまちづくりについて論じられる解答も多くあった。しばしばそれらは、複合的な意義をもつ法善寺横丁再興の事例がまちの個性を活かしながらも安心・安全であることや、さらにそれらが経済的な側面でまちを活性化したことを受ければ、一面的・部分的であったり、解答前段における整理を打ち消してしまったりする論理展開になりがちであった。ひとつのまとまりある解答として論述するためには、解答全体の論理的な一貫性を求めたい。